

「令和四年ご挨拶文」

和上職 米田述

自我の主観誕生を表現するのにどのように説明したら善いか、と思案するうち

令和四年の新春を寿き、かつはコロナ渦の急激な伝染に気も漫ろの日を重ねながら我身の老齡を感じ、ふと蓮如宗主の御文に

「この在所に居住せしむる根元は」の言葉を思い出し、

「あながちに一生涯を心安く過ごし、栄華・栄耀を好み、また花鳥・風月にも心を寄せず、あはれ無上菩提の為には、信心決定の行者も繁昌せしめ、念仏をも申さんともがらも出来せしむるようにもあれかしと思う一念の志を運ぶばかりなり」

との御指示が心琴に感じ、御先代附法院聖人の教旨に眼を止める中に、

キリスト教に説く原罪が全人類にあると説くのと、佛教の無明説と、ほぼ同意であるとの文に眼が止まりました。

原罪は、キリスト旧約聖書のアダムが神に背く罪を言ったのですが、西洋の思想は人間も神の創造から産まれた主張がこの結論に至ったのでしょうが、東洋思想・特に佛教では自我と言う出発点は認識が始まった時「一念の迷妄」と表現される時からの業力が積もり積もった所から起こりました。

顕名鈔に「シカルニ衆生一念ノ迷妄ニヨリテ真如ノミヤコヲ迷ヒイデ、流転ノ凡夫トナリシヨリコノカタ、ヒサシク塵勞ニオホハレテ、本有ノ理性ヲワスレタリ」の出発です。

聖人の金言は先ずダーウィンの種の起源を取り上げられて申さるには、

この生物が地上に生物として生存して、もし無心状態であつたら折角の生命を亡ぼしかねず、外界

との交渉を始む。これ知覚の働きで、遂に正しい認識不能の無明生起となる。

此れは地球上の「種の起源」から見た無明生起で、無明の始まりは地球以外の他の世界へ棲息したもっともっと以前かも知れません。

このお言葉で私達が注目しなければならぬのは「知覚が始まると生命保全の為に現象界に専ら知覚活動が働いて、生存するのに盲目的で、それ以外には知覚が働かぬ」

という流れで、

知覚に作用を起こさせている手許には認識不能となり、これを無明が生起する種の起源の上から教えられた事です。

では、知覚・認識作用を起こさせている源は何か。に就き次に申されるには

無量光明土（アミターバ・アミタユース）の限りなき光、限りなき生命の理想世界から地上の現実へ、不断の光明が理想化の誓（理想化活動）として久遠の古より照らしつづけていたのである。（カント先生は目的の国。親鸞聖は願土、彼国、我国と呼べり）

今、我らは現実の濁りの内において理想の虹を追うはこの故なり。

いつしか無明生起し、浄らかな光明の天空を覆ひ、我心は愛欲と我見の業火に泣く流転の旅ガラスなのです。

今は現象心となってしまった吾らの意や識が、本源の心（無量光明土の理想化作用）より生じ、知覚作用にて（現象界に）随縁して真如の理想化に反逆した認識の誤錯を許し一点の無明を生起したは「一步の異いが千里のチガイ」と明かされたのです。

私達の自我は、現象界に随縁した習慣の始まりは朦朧としていても、次第に鮮明となって遂に「これが我である」との認識が完成して自我誕生となり、知性が備わり完成されたものなのでした。

個人の家庭でも、国の形成でも同じことが言え、家庭は家風・家庭の個性と発達し、国ならば国の精神（国造りの雰囲気）から国民・民族・習慣の誕生と発展し、民族意識の国風と発達するのです。

これは個我の誕生と自我生成も同じであって、佛教には実相論と縁起論の説き方があって、実相とは活動でなく不動の真如そのものであり、縁起とは縁によって何かの動きが起こってくる説明の仕方で、私達の智力からは縁起が適切ですから、先ず佛教哲学では、この活動しなければならぬ自然法則を一番最初は阿梨耶識の活動から説きます。

この名前は果物の梨に由来し、真半分に切ると種子が左右対称になるからで種子が互いに影響しあう組織体系と見て、これを真妄和合の識体と名付けています。真心と妄心との交際を言うのです。

この識体説明を祖師聖人はウィン大学のフロイド博士の宗教真理学を応用されて、（先住聖人からの聞き書きです）

私達が乗物に乗って外の景色を眺めていると、景色はどんどんと変化を続け私達の意識も同じく変化に順応しています。

この時私達は外部の変化続ける景色を認識していますが、この立場を「覚」と言い、反して認識している自分に対しては認識していません。こ

これは「不覚」の立場です。この現象は同時に起きているのですが、「なぜ覚と不覚が存在するかと言えは知は相對の世界だからです」と祖師聖人は申されました。

これは私達に認識活動があるからです。この「覚ある故に不覚あり」とは大乗起信論の著者馬鳴菩薩の主張で佛教学の基礎となっているのです。この菩薩は佛滅後四百年後の人で佛教歴史上に菩薩の名が初めて登場された方で佛教体系を構築された人です。

論文の最初、帰敬序に「帰命」の宗教体験の字句が出てきますので特に取り上げたのですが、佛教各宗の中には祖師と建てる宗も多く、浄土七高僧の初祖龍樹菩薩は尚、五百年後の出世となりますから自ずから忘れ得ぬ存在となります。真妄和合の識に就いて、真心とは大理性界の理想化作用が現象界にも現れる無為法の立場から言われ、妄心とは生命活動の刺激によって、有為法の現象のみを認識する作用で、ここに「覚と不覚」の問題が生じた訳です。

この阿梨耶識が自我の主観成立の源となる朦朧状態が始まったのでした。

自我のこころの影の世界とも言えます。

二、朦朧状態が重なり遂に自我の確立が現れる。

この自我の確立された我らの状態を阿頼耶識と名づけられ、専ら有為転変する現象を実践する機能を確認する個性と発展し、自我の主観に発達したのが現在の私達なのでした。

この個性を阿頼耶識と言うのは「大きな頼り所を持つ意味」で名づけられ、これが前のアリヤの世界を指していることは自然と理解できましよう。

このように、もっぱら有為法の現象に対しては覚、大理性の理想化運動の無為法に対しては不覚の作用が無明を生じ、有為法（永遠に生滅変化を継続する法則）のみを絶対の寄所とした盲目の自我となってしまった我らの魂を救済しよ

うと、無明を破り、恵明を開く事に佛教の救いがあると主張するばかりなのです。

この状態を無視して（根本無明をそのままにして）神の子・佛の子として信用せよと言うならば、その説は虚偽のベールに包まれる悪魔の姿と恐れよ、と聖言は訴えます。

佛教は解脱の宗教です。何物かに神仏の影像を画き神秘性を主体とした祈りの宗教ではありません。

又、死の不安解消や死後の平和に重点が置かれ、信ずる者の心の中に、人間の愛や、やがて神の愛・佛の慈悲と転ずる奉仕の精神宗教でもありません。

佛教は解脱に名づく、サトリの宗教でホトケのサトリを得ることで、偽りの人間から真実の人間に帰ることであると主張される聖人の勅命は重く尊く阿頼耶の宮殿に轟き渡る如来興世之正説が開始され始めたのです。

この無明の識心の内容を親鸞聖は四大暴流と名付け、色々な経験として善悪の二業が種子として

能蔵され開発され活動が行われ、また種子として内蔵されるものすごい内容の無明暴流が源となり、これから生じた欲暴流（盲目的な欲暴）。有暴流（実在すると執着）。見暴流（理解して執着）が我らの自我の魂の実体と明かされ、永遠に続くこの荒々しい、野蛮な個性を救済しようとするのですから並大抵のことで解決出来ず、超経験の如来の叡智と大慈悲心と善巧方便に依って行われる他力修道の方法以外はありません。

以下聖言をお聞き下さい。

他力には往相の廻向という宗教教育に基づく成長の廻向と、還相の廻向という文化の技術に基づく創造の廻向が内具していて、これが南無阿彌陀仏の総合性として働き、この総合性の廻向に触れる者は、その内面に成長のための有機的（生命を持つ意味）な組織体が現れて、往生浄土の理想化を行うこととなり、又、創造のための理想化を開き出すのである。

尚、南無阿彌陀仏とはオサメ（統一原理）タスケ（構成の原理）スクウ（批判の原理）の三大

原理が現実に力強く働く有機的な大組織体なのである。

この大組織体が淳心、一心の後継の学者の内部に宿され、ここから大廻向は展開されるのである。

これを名号の成就と言うのである。

親鸞聖人は（末燈鈔）に「唯この誓ありと聞き南無阿弥陀仏に値ひまいらせたまうことこそ、ありがたくめでたく候。御果報にては候なれ」と述べられておる事をよくよく吟味せねばならぬ。

（以上）